

1. テキスト：「場所」「三」の第4段落242頁12行目から243頁14行目まで。

2. テキスト講読

第4段落

板書

① 有の場所 物	②相対的無の場所 或有を否定した無 <u>空間</u>	③絶対的無の場所 <u>すべての有を否定した無</u> <u>意識の野</u>
-------------	-----------------------------------	---

① 有の場所 色、物、 <u>空間</u> (235,15)	②対立的無の場所 <u>あらゆる有の否定</u> (220,8) <u>意識の立場</u> (220,5)	③絶対的無の場所 有無を包んだもの (220,7) =真の無の場所 (231,4)
-----------------------------------	---	---

二つの区分は異なっている！

於てあるもの
有

(物
働くもの

場所
物(有)

空間)
考えられた無
(力、潜在を以て満たされる)

種々なる合目的的世界（上の無生物と下の人間の間）

意識現象

(その第一段階)
意識の本体・意識我

意識の野
(精神作用を以て満たされる)
精神作用は as if (反省的判断の対象)

対立的無の場所
(意識的潜在を以て満たされる)
動的意味の潜在・物理的には無

第4段落

前段落で「自由意志」が立ち現れる過程が述べられた。この段落では同じことが、かかる自由意志の「於てある場所」としての「真の無の場所」が成立する過程として述べられる。冒頭〈有の場所〉〈相対的無の場所〉〈絶対的無の場所〉が区別される。「或有を否定した無」が「相対的無」で「空間の如きもの」とされ、「すべての有を否定した無」が「絶対的無」で「所謂意識の野の如きもの」とされる。そうして三つの場所の深化の過程を西田は「超越的なるものが内在的となるというのは、場所が無となることである、有が

無となることである」というように述べている。

ここで注意しなければならないことは、上記〈有の場所〉〈相対的無の場所〉〈絶対的無の場所〉の区分はこれまでの「有の場所」「対立的無の場所」「真の無の場所」の区分と必ずしも一致しないということである。そのことはまずその例示からして明らかである。まず「有の場所」が「物」に限定されている。こうした限定はこれまでなかった。またこれまで「対立的無の場所」は「有を否定した」(220,1)、「あらゆる有を否定した無」(同8)というように用いられ、その立場が「意識の立場」(同5)とされていた。ところがここでの〈相対的無の場所〉は「或有を否定した無」の場所であり、それは「空間の如きもの」とされている。これまでは「空間」は一貫して「有の場所」であった(235,15など)。そうして「すべての有の否定」という、これまでは「対立的無の場所」の規定であったものが「絶対的無の場所」の規定となっている。そうして「所謂意識の野の如きもの」という、これまでは「対立的無の場所」の規定であったものが「絶対的無の場所」の規定となっている。これまで「絶対的無の場所」は「真の無の場所」と同義に用いられ(231,4.232,5など)、「有無の対立をも超越してこれを内に成立せしめるもの」(220,12-13)という意味であった。しかしここでの「絶対的無の場所」は単に「すべての有を否定した無」の場所として、「対立的無の場所」を含むものになっている。「所謂意識の野の如きもの」が「絶対的無の場所」とされているのはその所為であろう。

まとめると、ここでは「有の場所」が「物」に限定され、「相対的無の場所」が「空間」ないし「力」の場となり、意識としての「対立的無の場所」が除外され、それが「絶対的無」に含まれている、ということになる。当然その意図が問題になる。明言はできないが、物(有)との対比における空間の無的な性格を際立たせるためではないだろうか(「物が空間に於てあると考えられる時、場所が物に対して全き無と考えられる」(245,6-7)という表現がある)。

さて「前に物であった場所」が、否定され(「或有の否定」)、無(「考えられた無」)となる時、「前に場所であった物」は「働くもの」となり、空虚(無)となった場所は「潜在」(力)をもって満たされる。場所が無になることによって物が働くものになった、これを超越的なものが内在的になったと呼んでいるのである。ここでは物の質料性が働くものの潜在性として捉えなおされたことを意味している。

次いで「意識の野に於ては前に物であったものは意識現象となり、空虚なる場所は所謂精神作用をもって満たされる」とされる。ここでは力の場が「或有の否定」すなわち物の否定としての「相対的無」であるのに対し「意識の野」が「すべての有の否定」としての「絶対的無」であることが比較的述べているだけで前者から後者への移行は述べられていない。そうして意識の野においては「場所がすべての有を否定した無なるが故に」「すべての現象が直接と考えられ、内在的と考えられる」とされる。

ここで「精神作用も無の場所との関係」とされる。もちろんこれは無の場所と精神作用という二つのものがあって、それが関係を持つということではありえない。その場合は精神作用といえども「物力の如き有の意味」を有することになるからである。この精神作用は「判断の対象として、限定することができぬ、唯所謂反省的判断の対象となることができるのみである」とされる。認識対象とはならず、〈あたかも～のように(als ob)〉という仕方ではしか語ることができない、ということである。その意味では「精神作用」というのもすでに〈als ob〉である。それ故に「自然科学的立場からは、精神作用なるものが否定されるのは此故である」と言われるのである。「意識の野に於ては、その場所が無となると共に、単に性質の場所」となる。この「性質」は物でも作用(働き)でもないことを言わんとしている。これまでもそうした在り方は、例えば「本体」に対する「様相」(228,2)、「存在としての「ある」」に対する「繫辞としての「ある」」(229,6)、「作用」に対する「状態」(同4)というように表現されてきたが、この「性質」という語も後に「純粹

性質」としてその後術語的に用いられることになる。以上は「真の無の場所」としての「意識の野」である。

意識の野において場所は無となり、単に性質の場所となって、「物」（あるいは「働くもの」）は消失する。しかしその無がなお「対立的無」である場合は、前に物（あるいは「力の場」）であった場所は「潜在」（「意識的潜在」）をもって満たされる。そうしてそこに「意識の本体」「意識我」が考えられることになる（この「意識我」は前に場所であった「物」、あるいは「働くもの」が形を変えて復活したものである）。この「意識的潜在」は「物力の潜在」とは異なるとされ、「動的意味の潜在」「物理的には無なるものの潜在である」と言われている。衝動などの無意識・潜在意識が念頭に置かれているが、脳内物質に還元されない限りにおいて、とすることであろう。以上は「絶対的無の場所」でも「対立的無」としてのそれである。

次いで「単なる有の場所から否定的無の場所に入るに従って、種々なる合目的的世界が考えられる、所謂非実在的な意味が実在性を有って来る」とされる。「否定的無の場所」とはさしあたり「対立的無」の場所のことである。「非実在的な意味」とは先の反省的判断（als ob）に関わっている。目的などの「意味」や「価値」は認識対象としては実在とは言えないという意味である。この場合「存在性が失われると考えられるが、唯有るものは何かに於てあるという場所の意義が変じて来るのである」。すなわち場所が力学的な自然から合目的的世界へと意義を変じて、意味が実在性を持つようになったということである。「存在の根柢を成す一般者が失われる訳ではない」とされる。